



共生の時代

'08
9月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



石油高騰で漁業ができなくなっている。
また温暖化で海にも異変が!



オーストラリアの干ばつが
食料不足の原因!?



大地が豊かなみもりを育む

みんなの声で創ります 食べものの「安心・安全」 子どもたちの未来!

この秋、「40万人組合員食べものアンケート」に取り組みます

■アンケート配布
9月22日(月) ~ 9月27日(土)

■アンケート回収
9月29日(月) ~ 10月11日(土)
※生協によっては、10月18日(土)まで回収するところがあります



考えてみよう!身近な食べもののこと。
見直してみよう!私たちの食のあり方。
守っていこう!日本の農業や漁業。
一緒に創ろう!豊かな未来を。子どもたちのために。

世界的な食料不足や食料危機が叫ばれ、私たちの「食」を取り巻く状況は
とても深刻です。
グリーンコープは、このような状況
を受け止め、グリーンコープらしい食
べもの運動を創っていくための組合員
アンケートを実施することにしまし
た。グリーンコープの食べもの運動の
主役は組合員です。その一人ひとりの
組合員と共に考え、未来を創るため
に、オールグリーンコープの取り組み
として展開します。

「40万人組合員食べものアンケート」
で出された組合員の声は、グリーンコー
プの商品政策や食べもの運動に生かさ
れることになっています。

Contents

グリーンコープを創った人たち(6) グリーンコープやまぐち生協 初代理事長 鄭 吉子	
「グリーンコープ」を貫き、「在日」を生き抜く	2
南と北の共生	
平和を願い、連帯を求めて、 パレスチナオリーブオイルの生産者が グリーンコープを訪問!	3
2008年青少年ネグロス体験ツアー	
ネグロスとの出会いにありがとう	4
子どもたちの夏	
酪農ホームステイ 岡山ふたみ牧場ファームステイ 行って! 見て! たいけん縦!!	5
グリーンコープ共生・平和長崎自転車隊 「不戦」を背に走った! 125km 2008年度 第1回平和学習会 生命と平和自体に価値がある、 平和と共生はグリーンコープのいのちです	
ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋)韓国への旅	6・7
2008年GMナタネ自主調査報告集in名古屋	
遺伝子組み換えナタネが日本各地で育っている	8
2008年度 第2回平和学習会	
侵略の歴史を踏まえ、現在の韓国を知る メーカー・生産者からのメッセージ(6) 宗像生産者グループ	9
農業への理念とこだわりを持ち続け グリーンコープと共に歩んできた 「ほんもの」の体験が豊かな人生を育む	10
坂本廣子さん講演会 グリーンコープがめざす生活協同組合⑥	11
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ	
未来へつなぐ20年 私の思い	12

グリーンコープは設立
して20年間、「食の
安心・安全」を求めてきま
した。そこにはいつも子ど
もたちの成長や家族の健康
を願う母親の思いが込めら
れています。グリーンコー
プのそのような姿勢は揺ら
ぐことがなく、どのような
場合も「人間が人間らしく
生きる」ことを信念として
貫いてきました。

世界は少しずつ
問題を孕んできた
一方、「穀物高騰」「低
すぎる食料自給率」「食料不
足」など、今、食べものを
めぐるさまざまな問題が私
たちに突きつけられていま
す。これは単なる「食べも
のが足りない」「食べもの
の値上げ」という状況では
なく、世界経済や地球温暖
化、石油高騰やバイオ燃料
などのエネルギー問題が複
雑に絡みあって世界的な食
料危機へとつながってきて

より産直へ
改めて「食」を見直す
グリーンコープはそれよ
うな小さな変化を見逃すこ
となく、きちんと受け止

いるのです。
日本国内では、食品に関
するさまざまな偽装事件が
昨年立て続けに起こり、
「食」に対する不安が一
気に高まりました。そして昨
年から今年にかけて起こつ
た中国製冷凍食品や農薬
混入事件は、私たちの食卓
を震撼させました。その結
果、日本の食料行政のずさ
んさや食料自給率39% (カ
ロリーベース) という低さ
が露呈されたのです。

め、できることから一つ
づつ取り組んできました。例
えば、「衰退していく日本
の農業や漁業など第一次産
業を守る」「国産の農産物
・原料へのこだわり」「自
然環境を守る」「南と北の
共生・連帯」などの取り組
みです。それに加えて、「情
報公開」を徹底することで
真実を明らかにし、さまざ
まなことを多くの組合員と
共有してきました。このよ
うなグリーンコープの姿勢
は間違いでなかったことが
明らかです。

※日本の穀物自給率は17.5カ
国(地域を含む)中12.5番
目、OECD(経済協力開発機
構)加盟30カ国中26番目(2
008年度農林水産省の資料
より)

20年の歴史を創った原点に戻る



グリーンコープやまぐち生協
初代理事長 鄭 吉子

朝鮮半島の南端に位置する麗水は景勝地である。鄭は1942年そこで生まれた。その2年前に発令された創氏改名によって吉子（ヨシコ）と日本読みの名前が付けられる。生後8カ月の時、両親に抱かれて海峡を渡り山口県に移り住んだ。当然故郷のことは憶えていない。以降、「在日」の一人として戦後を果敢に生き抜いてきた。



「グリーンコープ」を貫き、「在日」を生き抜く

空気のようにならぬように
自然にあった差別と偏見

1945年8月15日の日本の敗戦は、当時日本にいた236万の朝鮮の人たちには吉報であった。祖国へ帰ろうと皆準備をはじめた。結局そのうち170万人が帰国し、60万人が「在日」として日本に残った。九州・山口にいた人たちは船が出る関門地区へ続々と集結した。港まで来てはみたものの諸事情で帰国できない人たちはその近くに寄り添うように暮らしはじめた。同胞だけの小さな地区が形成され、鄭一家もその中に残った。料理上手だった母親は日々の糧にするため下関駅近くで食堂をはじめ、同胞相手に大いに繁盛した。子どもは鄭一人、大切に育てられ幸福な子どもだった。そんな時代、鄭にとつて忘れられない出来事がある。同胞たちが子どものために力を合わせてつくった朝鮮人の小学校が1948年、突然閉鎖されたのだ。その背景には、朝鮮半島を舞台にする東西の対立が決定的なものになりつつあった。まだ小学校一年生だった鄭は、ある日突然警察に追われ学校から家に逃げ帰った。昨日まで通っていた学校は厳重に封鎖され、その風景はただただ悲しかった。「在日」にとつ



2003年グリーンコープやまぐち生協で行われたシャボン玉フォーラムにて。韓国の生協からの参加者とグリーンコープの組合員との橋をかけた（左端が鄭さん）

ては、そのように理不尽に平穏な日々が覆されるのも、また日常だった。それから公立の小学校の片隅に建てられた分校のようなどころで日本の義務教育の授業を受けたが、子ども心にも感じるものがあつた。身体にまといつくような差別や偏見。「なぜなんだろう」とずっと思ひ続けた。

「グリーンコープ」を貫き、生かす組織だよ

鄭が自分を発見するのは北九州の朝鮮高校に入学してからだ。あらゆることに対して理論武装をし、同級生を鼓舞してまわった。恐いものなどなかった。その勢いで武蔵野にある朝鮮大学にすすみ卒業する。その後「組織」の幹部となり、自ら信じる道を突きすすんだ。だが、自分の中の正義と何が違うことに気付いてしまった。結局鄭は信じていた「組織」に失望し、果て母の元に戻り、食堂を手伝う。そこにたびたび食事に来ていた人から「洗剤の実験をするので見に来ないか」と声をかけられ、友人たちを誘って見に行った。金魚の実験を見て、自分の使っている洗剤が「生命の水」を汚していることに驚

いた。日本に来てから水が合わず、幼少期は近郊の温泉に通って体質改善をしたほどだ。そう言えば、故郷の地名も水にちなむ。水にどこか因縁めいたものを感じていた。そんな感傷と共に出会ったのがグリーンコープだった。だが、鄭の組織に対するアレルギーは根深かった。執拗に自分との対話を重ね、そろりそろりとグリーンコープの活動にかかわっていった。この世の中に人と人が自由で平等にかかわりあえる組織が存在するとは、在日の厳しい世界を生きていた鄭には想像すらできなかったのだ。グリーンコープという組織は差別や偏見とは一切無縁だった。この時、鄭は人生の中で初めて自分を真に解放し、急速にグリーンコープの土壌に惹かれはじめる。

鄭吉子として生きる

やがて山口県内のいくつかの生協がグリーンコープやまぐち生協として一つになろうという動きが起きる。当然の如く、組合員同士の間で相克が起きた。鄭は持ち前の率直さと誠実さでそれを乗り切り初代理事長になる。その過程で行岡（グリーンコープ連合初代専務理事）から言われた一言を今でも忘れない。「鄭さん、自分を大事に生きなさいよ」。当時の鄭は即座に心の中で反応していた。「そんなこと、あなたから言われなくても、私は私を大事にしている！」。だが後年、鄭はその一言の真意を心の底から悟る。「自分を大事にすることは、相手も大事にすることだったんだよね。あの頃去っていった人たちが今ここにいたらどんなにいいだろうって時々思う……」。行岡には一生頭があがらないと言う。

結局、鄭は理事長を9年、組合員事務局長を8年、グリーンコープやまぐち生協初の店舗の代表を3年余り務め、それぞれを「日本女性」に引き渡した。その間に行われた韓国の生協との組合員同士の連帯・交流では通訳を買って出た。韓国の人は「在日」が日本でどれほど差別されているか知っている。だからこそ胸を張ってその前に立った。それが彼女たちにグリーンコープを理解してもらった一番の早道だと思えた。

鄭は50歳になってようやく夢にまで見た故郷・麗水を訪れることができた。親戚らが集まって迎えてくれ、「あの小さなヨシコちゃん」がこんなおばさんになって」と驚いたり喜んだり。

帰途、飛行機は日本に向けて飛び立つとわずか20分で降下をはじめ、もう着くのかと思つた時、鄭は気が狂いそうになった。「たった20分！これを越えられなかった私の50年間は何だったのだろう」。涙があふれて止まらなくなった。

南と北の共生

平和を願い、連帯を求めて、パレスチナオリーブオイルの生産者がグリーンコープを訪問！



綾豚会事務所で綾町視察のまとめのインタビューを受けるワッファさん(左)とシャディさん



グリーンコープがパレスチナと出会い、オリーブオイルの輸入をとおして、パレスチナの人々との連帯・支援に取り組みはじめ、5年が経過します。この間、パレスチナを支援するためにオリーブオイルの取り扱いをはじめ、パレスチナに関する報告会や上映会などに取り組んできました。さらに昨年初めて実現した組合員によるパレスチナ訪問によって、相互の連帯は大きくすすんだと言えます。

それに呼応して、今年7月9日に開催された「グリーンコープ地域運動交流集会」にパレスチナからワッファ・スレイマンさんとシャディ・マホムッドさんが参加しました。2人は集会での報告後、グリーンコープの産直産地である宮崎県綾町を訪問し、綾豚会や綾菜会などの生産者と交流しました。



▲大山食品
大山食品では、発酵のすすみ具合を機の上に置かれた5円玉の変化(緑色を帯びる)で確認している。そのメカニズムについて話を聞く



JA綾町青果集荷場
集荷された人参の袋詰め作業の様子に自国の人参と比べながら見学するワッファさん

オリーブに平和を託して

オリーブは昔から、平和のシンボルとされてきた作物です。また、樹齢千年という生命力があり、命を象徴する樹木でもあります。取り組みがスタートして5年、パレスチナの大地に育つオリーブを搾ったオイル

は、パレスチナは紀元前からオリーブの産地であり、オリーブオイルはパレスチナの人々の生活を支える収入源として重要な位置にあります。そして今、オリーブの生産をはじめとする農業で自国の復興をめざしています。しかし、それを阻むようにイスラエルによる占領政策によって、パレスチナの人々は生きる術を奪われ続けているのです。

グリーンコープのパレスチナとの連帯の取り組みは、「ゲランドの塩」の著者コリン・コバヤシさん(フランス在住)をとおりしてPARC(パレスチナ農業復興委員会)やUAWC(パレスチナ農業開発センター)と出会ったことにはじまります。

オリーブオイル生産者とその協同組合

ワッファさんが住んでいるのはパレスチナ暫定自治区のヨルダン川西岸北部のアズーン村。30戸あるオリーブ農家を中心とした協同組合の唯一の女性運営委員です。

海外とのフェアトレード(グリーンコープの場合は民衆交易)をはじめめる前は、オリーブオイルの生産は生活を支えるのに十分ではなく、もちろん品質もよいとは言えませんでした。



綾町のJAS有機認証登録センター
土壌検査の担当者から有機農業に大切な土作りの大切さや検査の具体的な方法について詳しく説明を受ける



綾・野菜加工館
採れたての野菜が新鮮なまま冷凍されるようすを視察。パレスチナにはない、野菜の保存方法に関心を示した

しかし、フェアトレードによって、オリーブオイルの品質も画期的によくとなり、人々の生活の支えとなっています。フェアトレードは、作ったものを適正かつ公平な価格で取り引きし、難な立場に置かれた人々にとっては、とても意義ある取り組みなのです。

その一方、イスラエルの分離壁建設や入植地拡大は途絶えることなく、そのためにパレスチナの人々が丹精込めて栽培しているオリーブの木を根こそぎ伐採するのです。パレスチナの人々は分離壁によって分断された農地に近づくことさえできません。また、生活はもちろん、オリーブの栽培にも必要な水資源の大半が分離壁で遮られてしまっているのです。

とてつもなく大きな軍事力や経済力で襲ってくるイスラエルに対して、パレスチナの人々は果敢に闘っています。それを支えるのがオリーブオイルなどのフェアトレードです。それをおして、世界中の人たちがパレスチナの人々とつながり連帯しあうことが、パレスチナに大きな力を生み出すことになるのです。

JA綾町青果集荷場

農協の集荷場ではきゅうりと人参の出荷作業が行われていました。ワッファさんは、農民の目で収穫された作物の集荷・出荷のようすに目を輝かせていました。

JA綾町青果集荷場

農協の集荷場ではきゅうりと人参の出荷作業が行われていました。ワッファさんは、農民の目で収穫された作物の集荷・出荷のようすに目を輝かせていました。

綾菜会

綾菜会のメンバーの畑や田んぼを見学。特に水田のしくみに大きな関心を示しました。水田はパレスチナにはありません。なぜ畑に水が入っているのか、田んぼの周りに水路がめぐらされ、水が豊富に流れているようすは圧巻だったようです。

綾菜会

綾菜会のメンバーの畑や田んぼを見学。特に水田のしくみに大きな関心を示しました。水田はパレスチナにはありません。なぜ畑に水が入っているのか、田んぼの周りに水路がめぐらされ、水が豊富に流れているようすは圧巻だったようです。

綾・野菜加工館

地場で採れた有機野菜を冷凍する加工場です。旬の野菜を旬のまま瞬間冷凍する方法を目の当たりにして、自国でもできないだろうかという質問にも力が入りました。

慌しく視察を済ませた後、グリーンコープの産直生産者との交流会に参加しました。通訳を介しながら、国が違っても、同じ生産者としての思いは通じるものがあり、有意義な時間を過ごすことができたようです。

今回のワッファさんとシャディさんのグリーンコープ訪問や生産者との交流によって、パレスチナとの連帯は今後さらに深められていくことになると思われます。

宮崎県綾町視察

7月10日、福岡から一路宮崎へ。宮崎県綾町にあるグリーンコープの産直野菜の生産者の綾菜会、玄米黒酢のメーカーの大山食品、冷凍野菜加工メーカーの綾・野菜加工館と、綾町農協の集荷場や町が運営するJAS有機認証登録センターを訪ねました。ワッファさんとシャディさんはそれぞれの立場で、綾町が誇る有機農業のしくみなどを時間の許す限り、しっかりと視察しました。

2008年夏 第13回青少年ネグロス体験ツアー 7月24日～31日



グリーンコープのすべての取り組みには四つの共生(自然と人・人と人・女と男・南と北)の理念が貫かれています。青少年ネグロス体験ツアーは、その中の「南と北の共生」の取り組みの一貫として、1991年からはじまりました。

13回目となる青少年ネグロス体験ツアーに、ふくおか3人、くまもと6人、かごしま2人の11人の子どもたちが参加しました。

参加した子どもたちの報告を紹介します。

ネグロスとの出会いにありがとう

僕がフィリピンに行くことになったのは親が勝手に申し込んでいたからで、凄く嫌でした。説明会があったけど、行くという実感はありませんでした。当日の福岡の空港で初体験の飛行機に乗り、マニラへ飛び立つ時になってやっと海外に行くんだなと思いました。

バコロドの空港でフィリピンの人たちに迎えられました。それからはずっと一緒にセミナーハウスに泊まったり、ユボ村に泊まったりしながら、いろいろなワークショップをしたり遊んだりして仲良くなっていきました。フィリピンの子たちやジブニーの運転手、料理を作ってくれたベティーさんたちがとてもフレンドリーだったのですぐになじむことができました。

みんなと生活をしていく中で知ったことは、フィリピンでは3割の人が日本の多くの人よりも金持ちで、残りの7割の人がとても貧しいということです。それがフィリピンの長い植民地の歴史と関係あることも分かりました。

BGA(バランゴン生産者協会)の総会でフィリピンと日本の毎日の生活やどうしてこの交流会に参加することになったのかを紹介する劇を発表しました。反省会では、日本とフィリピンの子、一人ひとりが考えていたことが分かり、泣きそうでした。フィリピンから帰った次の日

学んだのは人に優しくすることと自分から何かをすること

グリーンコープかごしま生協 川上 眞弘さん(高2)

から、学校の合宿がありました。今までは思ったことがなかったのに、日本の高校生は考え方やすることが子どもっぽいと思いました。それと、一緒にフィリピンに行った子たちとは、今までとは何かが違う特別な友だちになったと思います。

フィリピンに行く時は、凄く嫌だったけど、日本に帰ってきたらもっとフィリピンに居たかったと思うようになりました。この交流会で学んだことは、人に優しくすること、自分から何かをすること、あと英語のテストで赤点とるくらい学校の英語ができなくても、とりあえず問題ないってことです。

最後にこの交流に関係したすべての人たちにありがとうと言いたいです。



BGA総会終了後に全員で記念撮影



BGA総会の集会で創作劇を発表。日常のようすを表現しているネグロスの子どもたち

ネグロスで過ごした一週間は本当にあっという間で夢のような時間でした。

たった一週間だったけれど、たくさんの思い出ができました。最初は慣れなかった食事、水しか出ないシャワー、ワークショップでやったいろいろなゲーム、滑り落ちそうになりながら山に登ったこと、夜遅くまでみんなでおしゃべりしたこと、ネグロスのみんなが観せてくれたフィリピンの歴史劇、でこぼこ道でジブニーの上に乗ったこと、ユボ村での民泊、そしてみんなで作った劇や歌など、どれも思い出深く、充実した一週間でした。

英語が分からなくて、もどかしい思いをたくさんしました。でも、伝えたい気持ちがあればお互いに伝えあうことは意外と簡単で、ネグロスのみんなともすぐに仲良くなれました。

中でも、BGA17周年記念集会以て歌と劇を披露したことが一番思い出に残っています。日本の文化とネグロスの文化、共に過ごした一週間とネグロスバナナの未来を表現した劇です。不

優しい気持ちや元気をありがとう

グリーンコープ生協くまもと 西住 詩野さん(高3)

安や緊張はあったけれど、成功してよかったし、観てくれた人たちにも喜んでもらえてうれしかったです。集会には、ネグロスクリスマスキャンパの奨学金で学校に通っている子どもたちがたくさん来ていました。彼らの好奇心旺盛で勉強熱心な姿には学ぶべきところがたくさんありました。

今思えば小さい頃、毎年母に連れられて「ネグロスクリスマスキャンパにご協力ください」と街頭募金をしていました。それがこのことに役立っていたのか、と思うとあの頃から私はネグロスとつながっていたという気がするし、今度は私がネグロスからたくさんの優しい気持ちや元気をもらえてありがとうと言いたいです。

このような素晴らしい機会を下さったみなさんに感謝しています。本当に行ってよかった!



カネシゲパークにある故グリーンコープ連合元専務理事兼重さんの墓前に手を合わせる。兼重さんはネグロスバナナの民衆交易に尽力した

兼重さんが分骨されている墓前には「クキゾウムシも悲しいのだよ」と刻まれている。バナナ山の生態系を守った兼重さんの言葉

酪農ホームステイ 7月22日～24日

グリーンコープの組合員の子どもたち〈小5～中2〉69人が生産者宅に泊まって酪農体験をしました

無事に産まれた 逆子の子牛

グリーンコープやまぐち生協
河村 侃^{あきら}さん (中1)



お世話になったミイケファームでの初仕事は、牛舎のそうじと、乳しぼりの前の準備のお乳をペーパーで拭く作業をやりました。次の日は、親牛の周りに散らばっているワラを集めて食べさせる仕事をしました。牛の食べる速度が速すぎて、こつちにワラをやっていたら、あつちにワラがない！というくり返して、クタクタになりました。

午後には子牛を売りに市場へ行きました。毛なみや大きさが値段が決まり、高い牛は15万円もするそうです。双子などの子牛は値段が低くなってしまうそうなのですが、ぼくががんばって毛なみをきれいにし、やった牛は12万円以上の値がつけました。

酪農家の苦労や 努力を知りたくて

グリーンコープ生協ふくおか
下拾石 晴香^{はつき}さん (小5)



牛舎での私の仕事は、ふんそうじと、子牛にバケツでミルクをあげることで。子牛と言っても大きいので、バケツをささえているのが大変でした。ふんそうじはにおいがダメだったけど、なれてきたらスムーズにできました。ふんそう

二泊三日のホームステイで、安永さんたちの苦労や大変さも分かり、酪農家の人たちに感謝して、牛乳を飲もうと思いました。



2008年

子どもたちの 夏

グリーンコープの組合員の子どもたちが今年も夏休みを利用して、生産者との交流を体験しました。びん牛乳のふるさと熊本県菊池地域の酪農家を訪ねる「酪農ホームステイ」。2006年にはじまり中国地方の取り組みとして続いている「岡山ふたみ牧場ファームステイ」。南九州の取り組みとなって4年目の「行って！見て！たいけん綾!!」。

子どもたちは牛の世話や子豚とふれあい、貴重な体験をすることができました。わくわくどきどきの感想を紹介します。

岡山ふたみ牧場 ファームステイ 7月26日～27日

産直国産牛の生産者をおかやまの子どもたち9人が訪ね、牛の世話などを体験しました



「ファームステイに行つて牛の世話とかしてみたい」とお母さんが聞いてきた時、ぼくは夏休みにいろいろなことをしたいと思つていたので、すぐに「行く」と答えました。

当日、ワクワクしながらふたみ牧場に着きました。ぼくはリーダーになりました。対面式のあと牧場内を探検をして、とても広かったのにおどろきました。いよいよ作業開始。せん用のマスクをもらって牛舎のくもの巣ばらいをしました。お昼ごはんの後にも引き続き牛舎のそうじ。暑くて大変だったけどその後大きなお風呂屋さんに来て行ってくれたのですごく気分

牛がとてもかわいかった

グリーンコープ生協おかやま 末田 祐介^{すけすけ}さん (小5)

持ちよかったです。その後お待ちかねのバーベキュー。おなかがいっぱいだったのでたくさん食べました。花火もやって、線香花火耐久レースでゆう勝しました。

次の日はえさやりからはじまりました。えさが軍手の上からささって「チクツ」としました。その後とうもろこしを取り、その重さをきそつたら準優勝でした。その後のスケッチタイムで牛の絵をかきました。牛がとてもかわいかったです。

牛の世話などをするのは初めてだったし、きょううな体験ができて、とてもいい夏休みの思い出ができました。

行って！見て！ たいけん綾!! 7月19日～20日

かごしま・みやざきの組合員、13家族47人が宮崎県綾町の生産者と交流しました

最初に行つた綾豚会館。工場では、豚のあぶらや肉のことについて教えてもらったあと、本物の子豚を触りました。子豚の毛は、とんがっていてなんとなくかたかったです。最後にやつと子豚をだきました。少し重くて「キーキー」と鳴きました。豚は、「ブーブー」と鳴くと思っていました。次に行つた大山食品で、

宮崎産豚では、きのこを育てているところに行きました。すずしくて気持ちよかったです。きのこの話を聞き、しゅうかくをさせてもらいました。そこではカブトムシもかかっていました。次にサツマイモをしゅうかくしました。機かいで掘りおこしたので、とりやすかったです。その後のごぼうのしゅうかくでは、ごぼうはねばり強くなかなかとれな



子豚は「キーキー」とないた

グリーンコープかごしま生協 三島 健志^{けんし}さん (小4)

玄米酢のできるまでを説明してもらいました。「かめ」のふたの上に五円玉があつて、それをみて酢のようすがわかるそうです。

宮崎産豚では、きのこを育てているところに行きました。すずしくて気持ちよかったです。きのこの話を聞き、しゅうかくをさせてもらいました。そこではカブトムシもかかっていました。次にサツマイモをしゅうかくしました。機かいで掘りおこしたので、とりやすかったです。その後のごぼうのしゅうかくでは、ごぼうはねばり強くなかなかとれな

コープ共生・平和長崎自転車隊
回共生・平和銀輪隊
回共生・平和自転車隊



A group of cyclists is riding across the Oiwake Bridge. In the foreground, a man in a red cap and black long-sleeved shirt is riding a red bicycle. Behind him, several other cyclists are visible, some wearing white jerseys with Japanese text. To the left of the cyclists, a blue truck is driving towards them. To the right, a white truck with green and white stripes is driving away. The bridge has a white metal railing on the right side. The background shows a clear blue sky and some greenery on the left.

毎年8月8日～9日、二度と戦争を起こさないことを誓いながら「不戦」のゼッケンを背に、長崎市爆心地まで自転車で走る「共生・平和長崎自転車隊」に取り組んでいます。

今年も、全コースを走る中学生による銀輪隊48人、小学生や大人の自転車隊116人が、力の限りペダルを踏みました。

8月9日11時2分、総勢400人が爆心地の松山公園で原爆投下の時を迎えました。原爆の犠牲になった人々を思い、平和の尊さを噛みしめ、不戦の誓いを胸に刻んだ2日間となりました。

宮崎から来た甲斐一成くん。銀輪隊で走り抜いた。「途中の日見峠ではきつくてあきらめそうになっただけど、応援の人たちの『ガンバレ』の声をもらいました」



故武田桂二郎さん（グリーンコープ連合初代会長）の呼びかけと、グリーンコープの母体の一つ「無名舎」（現「柳川こどもの家」）の託児所にかかわった人たちの熱が生んだ取り組みでした。子どもたちに刺激と反応の、豊かな世界を用意したいと考え、1984年柳川から唐津まで走る自転車隊がはじまりました。



日本軍「慰安婦」歴史館では慰安婦問題を研究している日本の若者（前列左端）からていねいに説明を受けることができました。後列右から2番目が小松さん

第12回 ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋) 韓国への旅 7/26~7/28

今年も平和の取り組みの一つとして「ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋) 韓国への旅」が行われ、地域で平和の取り組みを担う組合員・事務局など12人が参加しました。

例年、「ピョンファ・エ・ダリ 韓国への旅」が取り組まれ、参加された方の報告を聞いて韓国と日本の悲しい歴史については知っているつもりでした。あいにくの雨で、傘を買

うというところから私たちの平和の旅ははじまりました。独立記念館では、小学生くらいの子どもの多さに驚きました。韓国では子どもの頃から歴史について知ることが大切にされているのは知っていました。韓国と日本の歴史に関する自分の知識が単なる受験対策の域を越えないものであったことを恥ずかしく思いました。植民地時代の非道な事

実に目も耳も覆いたくなる展示物の数々。朝鮮の人々は母国語を禁じられたり食べものを取り上げられたり家を焼かれ家族の焼かれる臭いの中で、「必ず独立する」というたくましい力を持つようになったのだと思います。そして、自分の国を愛し家族を守りたいと思う当時の人々の命をかけた魂の戦いや運動は今も韓国の方たちの誇りとなっているのだと思います。独立運動の展示ブースの「行進する人々の像」は悲しさや悲しい表情でなく、信念に満ちた強い表情でした。

「日本軍『慰安婦』歴史館」と「ナムムの家」で感じた心の痛みと怒りは同性であることを越えたものでした。取り返すことのできない大切なたくさんの方の幸せをつぶしてしまったことを、私たちは忘れてはいけません。その事実を知らなければいけないと思いました。

「二度と繰り返すことがないように」と、今も戦い続けているハルモニたちの、しわがたくさんの温かい手が印象的でした。西大門刑務所歴史館でも、拷問や人としての尊厳を奪う行為に狂気を感じました。風も通らない陽も射さない暗闇の中でも消えることのなかった「独立をめざした意志」や「平和をめざした願い」を私は忘れません。そのためにはグリーンコープの不戦の考えがより大切だと強く思いました。

グリーンコープ生協ふくおか副理事長 小松 実加

子どもたちの幸せのために、平和を願い、連帯しあう

子どもたちの幸せのために、



平和のつどいでのあいさつ

グリーンコープ共同体代表理事 吉田 文子

自転車に乗った人、応援した人、この取り組みを支えたスタッフ、すべての人たちが戦争を許さない気持ちで柳川から爆心地・長崎をめざし走り抜きました。また、直接参加していない人たちの「不戦」の思いは、原爆落下中心碑に奉納する折り鶴やメッセージに託されています。

戦争が起きるには条件があると言います。それは「自分だけが幸せであればいい」「自分だけが正しい」「人を認めない、理解しようとしめない」、そんな人間の気持ちが戦争につながる条件だと思います。それらの条件を無くし、みんなで幸せになっていく、それがグリーンコープ運動です。一緒に貫いていきましょう。



各単協から届けられた千羽鶴を奉納し、原爆慰霊碑に祈りを捧げる

「自然としての生命自体に価値がある」がすべての前提です。平和時にも日常的な小さな争いはたくさんあります。その延長として国家と国家の間における戦争に繋がっていきます。平和時に発生する争い(正当防衛を含む)をなくすために、人が持っている自然性を、人が持っている文化性が対象化していく(取り扱う、そしてその際、どのように対象化していくか、ということに、私たちの未来がかかっているのです。そのためには「情報公開」と「参加」が必要です。すべての情報を組合員に公開し、取り組みに参加できる条件と機運をどのように準備できるか、ということがグリーンコープの考える文化性の一つです。こうしたことを大事にしていければ、何よりも大切な自然としての生命が守られていくと考えます。

とすれば、平和の究極の使命は福祉ではないかという考えに繋がります。誰にでも訪れる子育てと老いの問題を、組合員の出しあう力で支えていきたい、自然性に基づく家族の概念をもう少し広げて、家族に近い形で助けあう「共助」という形で福祉を考えています。

これからも、自転車隊の取り組みで考えてきたことを、グリーンコープのアンカー(錨)として、グリーンコープ共同体のあり方や取り組みにつなげてゆきたいと思っています。

共に平和を考える

韓国の仲間の歓迎はうれしかった。心のこもった言葉、楽しい交流会の歌や息切れするほど踊り続けた時間は、とても重い見学と心に残る痛みを、そつとやわらげてくれるものでした。私たちの活動や運動に生かしていくことを胸に抱きながら、これからも一緒に平和について考えていきたいです。

お土産に夢中になる娘が「平和」そのものです。

「不戦」を背に

グリーンコープ
第16回
第21回



長崎駅前交差点では自転車隊の幼い子どもたちも、隊列を

原爆投下から63年経過し跡は心や体に残ったままで争や核爆弾やテロなどで大とのないよう、争いのないを心から願います



「平和のつどい」でアピール。銀輪隊代表・矢野光海くん

グリーンコープ平和論について

1988年、戦後50年にあたって、「不戦決議」をグリーンコープ総体として確認しました。

「自然としての生命自体に価値がある」がすべての前提です。

平和時にも日常的な小さな争いはたくさんあります。その延長として国家と国家の間における戦争に繋がっていきます。平和時に発生する争い(正当防衛を含む)をなくすために、人が持っている自然性を、人が持っている文化性が対象化していく(取り扱う、そしてその際、どのように対象化していくか、ということに、私たちの未来がかかっているのです。そのためには「情報公開」と「参加」が必要です。すべての情報を組合員に公開し、取り組みに参加できる条件と機運をどのように準備できるか、ということがグリーンコープの考える文化性の一つです。こうしたことを大事にしていければ、何よりも大切な自然としての生命が守られていくと考えます。

とすれば、平和の究極の使命は福祉ではないかという考えに繋がります。誰にでも訪れる子育てと老いの問題を、組合員の出しあう力で支えていきたい、自然性に基づく家族の概念をもう少し広げて、家族に近い形で助けあう「共助」という形で福祉を考えています。

これからも、自転車隊の取り組みで考えてきたことを、グリーンコープのアンカー(錨)として、グリーンコープ共同体のあり方や取り組みにつなげてゆきたいと思っています。

韓国の仲間の歓迎はうれしかった。心のこもった言葉、楽しい交流会の歌や息切れするほど踊り続けた時間は、とても重い見学と心に残る痛みを、そつとやわらげてくれるものでした。私たちの活動や運動に生かしていくことを胸に抱きながら、これからも一緒に平和について考えていきたいです。

お土産に夢中になる娘が「平和」そのものです。

遺伝子組み換えナタネが 日本各地で育っている

2008年 GMナタネ自生調査報告集会in名古屋



報告会翌日、四日市港周辺でのナタネ採取後に行った検査では、ほぼすべての検体からバスタ耐性とラウンドアップ耐性の両方とも陽性反応が出た

日本では食用油の原料として年間約200万トンの西洋ナタネ（キャノーラ）が輸入されており、その82%がカナダからで、同国産の大半がGMナタネです。そのGMナタネが輸送途中のトラックからこぼれ落ち、発芽した自生GMナタネが全国各地で見られています。さらに在来種、または同じナタネ科の野菜（カブや白菜、小松菜、チンゲン菜など）との交配も懸念されます。知らず知らずのうちにGM食品が私たちの消費者のテーブルにのぼる可能性もあるのです。

グリーンコープは全国の生協や市民団体などの有志と共に、GM汚染の実態を把握し減少させるために、毎年自生GMナタネのフィールド調査を行っています。この調査活動は、市民

による監視活動として定着してきました。調査結果を受けて、それぞれの自治体への要望書提出や、製油会社に対し輸入ナタネ種子の飛散防止策や自生GMナタネの刈り取りを求めるなど、行政や企業側への働きかけも続けています。

日本各地でGM（遺伝子組み換え）ナタネの自生調査がはじまって今年で4年目になります。現在はヨーロッパや韓国でも調査がはじまるなど、世界的にもGM汚染への関心が高まっています。一方、穀物がバイオ燃料の原料に使われることから、食用がひっ迫するという事態も起こっています。

今年もグリーンコープ報告集会に続き、全国の調査結果の報告集会が7月12日愛知県名古屋市で開催されました。報告集会のようすとGM作物の現状について報告します。

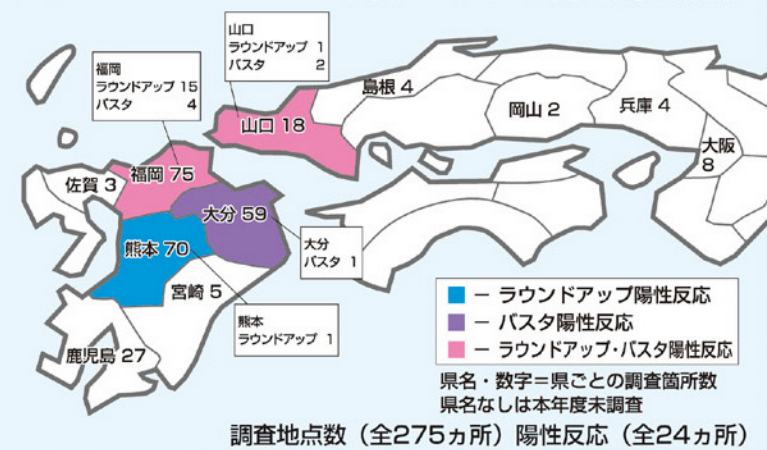
報告会ではまず、四日市大学講師・河田昌東さんから「ドイツブレメン大学GM問題会議に参加して」と題し、ヨーロッパのGM問題への関心の高きなどについて、講演がありました。京都学園大学教授の金川貴博さんから「遺伝子組み換え技術の問題点」の講演で、食品の安全性は長年の経験からしか判断できないという話がありました。続いて、それぞれの団体から、29都道府県の飼料工場付近や国道沿いなどナタネの輸送ルートを中心に重点的に行った調査報告がありました。また、「遺伝子組み換え食品を考える中部の会」と「生活クラブ生協・愛知」からは、それぞれGMナタネの汚染が深刻な四日市港周辺と名古屋港等の調査について、映像を交えた報告と共に、「この間続けてきた企業への清掃・種の飛散防止策の要請や抜き取りの甲斐があり、数は減少してきたが、在来ナタネとの交雑が

今後心配され、監視が必要」と今後の取り組みの継続のアピールがありました。グリーンコープは、福岡はじめエリア内の24カ所からGMの陽性反応がありGM汚染が確実に広がっているようすを報告しました。「生活協同組合連合会」からは、兵庫県で陽性反応が出ていること、親子などについて報告がありました。また、鹿島港から家畜の飼料工場までの路線を調査した報告がありました。「農民連食品分析センター」は全国で調査を行い、港周辺

最後に、行政や企業に対し訴えを続けること、遺伝子組み換え食品は作らない、扱わない、食べないという立場を貫くというアピールを採択し、閉会しました。

最後に、行政や企業に対し訴えを続けること、遺伝子組み換え食品は作らない、扱わない、食べないという立場を貫くというアピールを採択し、閉会しました。

グリーンコープ2008年度GMナタネ自生調査結果



「GMナタネはいらない！」の声を届けに…

西オーストラリア州訪問

グリーンコープ生協くまもと理事長 久米田 薫

6月9日～14日、オーストラリアの西オーストラリア州を訪問しました。同州は非GMを政策に掲げています。一方これまでGM作物を栽培していなかったビクトリア州とニューサウスウェルズ州でGM作物栽培が解禁されました。今回の訪問の目的はGMナタネ栽培と非GMナタネ栽培の選択肢で揺れるナタネ農家に「GMナタネはいらない」の声を届けることです。

GM反対の立場をとっているキム・チャンス農業大臣と面会。日本の消費者の代表として非GMナタネ栽培の継続をお願いする要望書を手渡し、西オーストラリア州のGMの現状を聞きました。キムさんが農業大臣の間はGMに移行することはないことが分かりました。また、州議会を傍聴する貴重な体験ができました。議会で州知事が「日本の消費者は非GM食品を食べたいと望んでいる。私たちは日本の消費者を失望させてはいけない。…今日来ている日本の友人たちを安心させたいと思っている」と発言。GM問題を真剣に受け止めているようすが分かったことは何よりの収穫でした。訪問の一番の目的であるウィリアムズで行われた市民集会には約100人が参加。GM推進派と反対派のパネルディスカッションが行われました。GM反対派からはGM作物が栽培された際の隔離のしかたやGMナタネの収量が多くなることへの疑問点などが出され、推進派と反対派の白熱した議論が展開されました。推進派は非GMナタネはGMナタネより収量が落ちると信じていました。日本からは日本国民の80%がGM食品を食べたくないと思っていることなどをアピールしました。

「GM作物はいらない！」と今後も声をあげていきたいと強く感じた訪問でした。

世界の食料危機を加速させるGM食品

天笠啓祐さん報告要旨

現在、GM作物やGM食品が食料危機救済の切り札のように扱われようとしている。「GM食品は生産性が高く、干ばつにも強い」という理由からだ。しかしこれはまったくのウソである。現在実用化されているGM作物は、除草剤耐性と殺虫性だけで、生産性の高さは、干ばつに強いなどの特性はまったくない。

食料危機を解決する手段としてGM作物栽培面積が拡大すれば、その種子を扱う多国籍企業による「種子の支配が強まり、農家は作る権利を失い、食料危機はむしろ加速することになる」。

食料危機の理由は大きく二つある。一つはバイオ燃料の原料である穀物に投機マネーが集中したこと、食料の価格が上昇、その利益を占める一部の国や企業が独占していることにある。

もう一つは、開発途上国が食料を先進国からの輸入に頼らざるを得ない世界経済の構造だ。輸出国が輸出の規制をしたり、穀物価格の高騰で、食料が輸入できなくなり、食料を得るため暴動などが起きている。

いまの食料危機はアメリカの穀物メジャーやモンサント社などのGM推進企業が国に提言したため、特にトウモロコシ価格が高騰したことによる。

アメリカではGM作物の栽培が急速に広がっており、もはやGM作物を選択するしかない。食料危機が進むと、非GMを選択する余地はなくなるのでは？という声もあがり、はじめています。米や小麦など、GM作物の開発が再び活発になっているなど、厳しい状況もある。

生産性をあげるために連作した結果、現れたのが害虫の発生だ。その害虫対策として殺虫性GMトウモロコシの栽培が広がっている。ところがそれに対する耐性害虫が増加し、逆に有害な殺虫剤を使用する状況になっている。GM作物への依存度を高めるアメリカの農業は、この「負の循環（スパイラル）」に陥っている。

一部の国や企業が踊らされる世界市場に、ナタネを「食べもの」として、消費者やメディアがどう受け止めるか、どう行動するのが重要だ。今こそ、声をあげていかなければならない。



三重県四日市港周辺では、夏でもこぼれ種から発芽したナタネが育ち、数多く成長していた

第2回 平和学習会 2008年度

グリーンコープ共同体組織委員会主催

近現代の日朝関係等に関する主な事項

1910年	「韓国併合ニ関スル条約」強制締結
1937年	日中戦争全面化
1938年	朝鮮教育令を改正して、朝鮮語の授業を実質的に禁止
1940年	朝鮮で創氏改名を実施
1941年	太平洋戦争はじまる
1945年	日本敗戦により朝鮮が植民地支配から解放される
1948年	済州島4・3事件 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国成立
1950年	朝鮮戦争はじまる
1965年	日韓基本条約に調印
1979年	1963年からの朴正熙独裁政権終焉
1980年	軍部によるクーデター 全斗煥大統領就任 光州事件（クーデターへの抵抗）が起きる
1987年	大統領の直接選挙を求め、大規模な抗議行動が起こる（6月民主抗争）
1988年	直接選挙を実施、盧泰愚（軍人出身）政権 ソウルオリンピック開催
1993年	金泳三政権 軍部に対する文民統制を確立する 全斗煥元大統領・盧泰愚前大統領が 大法院にて実刑判決を受ける
1998年	金大中政権 済州4・3特別法、疑問死真相糾明特別法制定
2003年	盧武鉉政権 反民族行為真相糾明法、 真実和解のための過去事整理基本法 など制定
2008年	李明博政権

日本の植民地支配について

1910年日本は朝鮮を併合し、その後35年間植民地として支配してきた。そこで行われたのが日本への同化政策だ。とくに戦時体制期には朝鮮の人々を「皇国臣民」とみなし、創氏改名や日本語の強要、神社参拝、「皇国臣民の誓詞」の斉唱などを強いた。

1940年の創氏改名で朝鮮人の姓名を日本式の氏名に変えたが、戸籍には朝鮮人であることは記載され差別の根拠となった。しかも戸籍は強制連行や徴兵、徴用などを行うために日本人と別に管理された。

こうした史実は、韓国の教科書でも取り扱われており、日本の植民地支配を侵略であったと厳しく批判している。しかし、同時に親日派と呼ばれる日本の支配への協力者がいたことも記載されている。

韓国ではこれまで約20年間にわたって、過去清算の取り組みが行われてきている。この歴史的歩みが国家権力の横暴に対しては行動をもつて抗議していくという政治意識の高さの背景にあると言える。

1980年代以降ラテンアメリカ諸国や南アフリカでは過去の政権による人権侵害の実態を調査するため「真実・和解委員会」がつけられた。民主主義運動の弾圧や人権の抑圧に関する歴史的な真相糾明と清算は、今日世界的潮流となっている。

過去清算の持つ意味

1980年代以降ラテンアメリカ諸国や南アフリカでは過去の政権による人権侵害の実態を調査するため「真実・和解委員会」がつけられた。民主主義運動の弾圧や人権の抑圧に関する歴史的な真相糾明と清算は、今日世界的潮流となっている。

2003年からの盧武鉉政権では、「真実・和解のための過去事整理基本法」や「反民族行為真相糾明法」を制定した。日本の植民地時代の親日派の行動を糾弾し抗日独立運動や戦後の人権蹂躪・暴力・虐殺・疑問死事件を包括的に調査するなど本格的な過去清算をすすめた。しかし、現在の李明博政権は、過去清算関連の委員会の統廃合を国会に提出するなど、過去清算を後退させる方向を見せている。

侵略の歴史を踏まえ、現在の韓国を知る

韓国の現代史から学ぶ



講師 藤永 壯さん
大阪産業大学人間環境学部教授、専攻は朝鮮近現代史。
『戦争・暴力と女性3 植民地と戦争責任』（共著、吉川弘文館）他

政権を揺るがす100万人の街頭デモ

最近、テレビなどメディアでも報道されているように韓国社会は大きく揺れている。李明博政権によるアメリカ牛の輸入再開（BS E問題が未解決）等に反対する高校生のインターネットサイトでの呼びかけなどが発端だ。学生（小、中、高、大学生）や乳母車を押す若い母親、高齢の人まで100万人が街頭での抗議行動を起こしている。政党や運動団体などの組織的な背景のない市民の自由な自己表現としての示威行為だ。この事態に大統領が謝罪し一部の閣僚が辞職するという状況となっている。現在の韓国は韓流ドラマ

など、日本人にとっては身近な存在だ。しかし、過去の日本の植民地時代やその後の軍事独裁政権を克服して現在の韓国社会がある。そうした歴史的背景を日本人はほとんど知らない。現在100万人の市民が街頭デモをする今の韓国を知るためには、日本による植民地支配やその後の現代史について学ぶ必要がある。

民主化をより強固なものにするために

日本の植民地統治は1910年から始まり、1945年、日本の敗戦と共に終わった。その後ソ連とアメリカによる東西の冷戦の中で、朝鮮は南北に分割されてしまった。韓国は共産主義に対抗する反共国家としてつくられた。民主主義は表面的なもので民主化や人権を著しく抑圧する権威主義的な政府が続いてきた。

1979年、朴正熙独裁政権は部下の大統領殺害で終焉。その後、1980年に軍部のクーデターが起き戒厳令が敷かれた。大学は閉鎖、政治活動や言論は徹底的に弾圧されたため、これへの反発が光州市を中心

に起きた。学生や市民のデモは市街戦へと発展し、166人が死亡、けがや行方不明者が5千人以上という事態になる。後の韓国の歴史に大きな影響を与えた光州事件である。

1987年には、民主化運動をしていた学生の獄死を発端に、憲法改正による大統領の直接選挙を求めて100万人を超える市民の大規模な抗議行動が起こった。翌1988年には、直

接選挙制が実施されるが、全斗煥政権で与党の党首をしていた盧泰愚（軍人出身）が大統領に当選する。

盧泰愚政権は光州事件での民主化運動を弾圧した側の政権である。民心を得るためには光州の民主化運動の清算が必要と考え、光州市民に金銭的補償などを実施した。しかし、真相の究明は行われなかった。

1993年、政権を引きついだ金泳三大統領はそれまでの軍部に対して文民統制を確立し、光州事件の真相糾明に向かう。光州事件に限り控訴時効を廃止する法律を制定し、全斗煥・盧泰愚政権はクーデターという不法な手段で政権をとったことから、内乱罪で実刑判決を受ける（数ヵ月後特赦で釈放）。成功し、政権をとったクーデターであっても処罰を受けることになった。

光州事件では学生運動をそのかしたとして投獄、かつて東京滞在中に拉致された、いわゆる「金大中事件」で有名な金大中による政権が1998年から

金大中政権は、済州4・3事件に関する特別法を制定し真相を糾明した。また、「疑問死真相糾明特別法」を制定し、民主化運動関係者の不慮の死に公安機関がかかわっているのではないかと疑われる事件について、真相糾明を行おうとした。

2003年からの盧武鉉政権では、「真実・和解のための過去事整理基本法」や「反民族行為真相糾明法」を制定した。日本の植民地時代の親日派の行動を糾弾し抗日独立運動や戦後の人権蹂躪・暴力・虐殺・疑問死事件を包括的に調査するなど本格的な過去清算をすすめた。しかし、現在の李明博政権は、過去清算関連の委員会の統廃合を国会に提出するなど、過去清算を後退させる方向を見せている。



独立記念館の敷地内にあるモニュメント（民族の塔）

接選挙制が実施されるが、全斗煥政権で与党の党首をしていた盧泰愚（軍人出身）が大統領に当選する。

盧泰愚政権は光州事件での民主化運動を弾圧した側の政権である。民心を得るためには光州の民主化運動の清算が必要と考え、光州市民に金銭的補償などを実施した。しかし、真相の究明は行われなかった。

**メーカー・
生産者からの
メッセージ**

宗像生産者グループ



産直みかんのよさをアピールする「劇団やまき」。マイクを持って音頭をとるのが栗原さん

家業の農業を継ぐや否や、「アンボンタン」という自主活動組織をつくった。つくったというより自然発生的に人が集まり、語りあいの場ができたのだ。同じ地域の農業青年をはじめ、近くの教育大学の学生や隣町の中間に住む労働者などが入れ替わり立ち替わり集まってきて、学習会や集会を重ねていった。「マルクス・レーニンの勉強会なども開き、日々精力的に語りあっていましたね。多い時は数十人という若者が集結していました」。栗原さん

社会の矛盾に立ち向かう
エネルギーに満ちていた

農業をはじめた1970年代は、学生運動真つ盛り、見渡せばいろんな社会矛盾が露呈し、その矛盾に学生らが立ち向かっていた時代でもあった。「あの当時、百姓の目からは、何と言っても農協のやり方に矛盾を感じていました」。

「も」 う40年になります」。

22歳の頃からはじめた農業へのこだわりは色褪せてはいない。栗原さんは現在62歳。農業高校を卒業して農業試験場へ就職、農業を生涯の仕事として選択。そして、グリーンコープの前身生協である共生社との出会いなど、人生の節目に不思議と重要な人との巡りあわせがあった。

は昨日のことのように鮮明に覚えているという。ただ話をするだけではなく、方版刷り広報紙も発行し社会に強く訴えていった。世の中を厳しく批判してきたエネルギーは、やがて農業に傾斜していくことになる。それが宗像生産者グループのはじまりとなる。

**ほくちく生協との出会い
それが産直関係のはじまり**

「アンボンタン」の自主活動は、4～5年続いたという。おもしろい農業青年らがいるという噂は近隣地域へ広がっていった。当時福岡県中間地域に、ある地域生協が立ちあがっており、その生協の職員から声がかかった。それがのちのグリー

ほくちく生協との出会い
それが産直関係のはじまり

「インコーポの屋台骨となる
共生社の前身のほくちく生
協だった。『当時は出せる
ものはみかんしかありませ
んでしたから、産直のはじ
まりは『みかん』です』。自
然に任せた栽培方法で毎年
実を付けていたから、すぐ
に手配することができた。
しかも、農協を介さずに取
り引きをする産直関係がそ
こからはじまったのだ。」

しかし、当時のほくちく
生協は設立したばかりで、
組織的な運営のしくみが整
っていなかった。組合員か
ら注文を受けるのを忘れて
しまい、後で担当職員と一
緒に1軒ずつ組合員宅を売
り回ったこともあったとい
う。結果みかんが余ってし
まい、どうしようもなくて

ここからはじまったのだ。

遠賀川に破棄したことも思
い出として残っている。
ほくちく生協との関係が
成立すると、やがて、熊本
市の共生社生協へもみかん
を届けた。その後、共生社
生協が大きく一つになる
と、組合員や職員対象に学
習会や交流会が企画され、
栗原さんは講師として精力的
に出かけて行つた。

その頃宗像生産者グルー
プはふくおか東部生協など
福岡市内の生協との関係も
つくつていた。それは、グ
リーンコープのもう一つの
主体となるちくれんに属す
る地域生協であつた。

**安心・安全、
そしておいしいみかんの
利用普及活動**

その頃宗像生産者グループはふくおか東部生協など

組合員に浸透していった。2001年からは組合員も参加して予約利用をすすめる「おもちゃのカンツメ」として進化してきた。その準備のための語り部を育てる「りんご博士・みかん博士養成講座」にも取り組むようになった。こうしてみかんばかりでなくりんごの予約利用は広がり、定着していった。

**未来へつなげる農業を
後継者へつなぐ**

宗像生産者グループは今では、みかんやレモンなどの柑橘類をはじめ、きゅうり、キャベツ、チンゲンサイなどを出荷している。減（無）農薬に徹する姿勢はずつと変わらない。若い後

ていった。

A group of seven people, four men and three women, posing for a photo inside a large greenhouse. The men are standing in the back row, and the women are sitting or kneeling in the front row. The greenhouse structure is visible in the background, with metal frames and plastic covering.

宗像生産者グループメンバー(一部)。後列右端が栗原さんの長男大さん

1988年、グリーンコープ連合が設立すると、生産者組織の中に、柑橘部会ができた。そこでは生産したみかんを商品として責任を持つて組合員に届けるために産直生産者が積極的にグリーンコープと相談をしてきた。一番の案件はみかんの利用普及だった。グリーンコープ発足当初は好調だったみかんの利用は1990年に入ると急激に落ち込んだ。それに危機感を持った生産者が自ら出向いて、みかんのよさを語る「出前交流会」に取り組んだ。その後も趣向を凝らした取り組みを展開する中から、生産

継者も育っており、この間貫いてきた農業へのこだわりはその層に引き継がれている。栗原さんの長男（たけ）さんもその一人だ。めつきり病気がちになった父親に代わり、父親に学んだ農業から自分の農業の確立をめざしている。「パソコンも自由に使いこなして、いろんなことに挑戦しているようですが、黙って見ています」。いつか父親を超える日が来ることは間違いない。当の栗原さんは「今年2月に孫が生まれました。その子が二十歳になるまでは生きていたい」、そう言うて目を細めた。

農業への理念とこだわりを持ち続け
グリーンコープと共に歩んできた

者らが役者になってみかんのよさをアピールする「劇団やまき」が情宣活動の一つとして誕生した。各単協で行われる生産者の「劇団やまき」は好評を博した。生産者とグリーンコープの協同の情宣計画は成功し、産直みかんのよさは急速に組合員に浸透していった。

2001年からは組合員も参加して予約利用をすすめる「おもちゃのカンツメ」として進化してきた。その準備のための語り部を育てる「りんご博士・みかん博士養成講座」にも取り組むようになった。こうしてみかんばかりでなくりんごの予約利用は広がり、定着していった。

「ほんもの」の体験が豊かな人生を育む

坂本廣子さん講演会

6月24日、山口県下関市の海峡メッセ下関にて、グリーンコープやまぐち生協主催で、食育・料理研究家の坂本廣子さんによる「食べる 生きる 育つ ～食生活の重要性について～」と題した講演会と、メーカー大試食交流会が開催されました。メーカー大試食交流会にはグリーンコープ商品のメーカー32社が自慢の商品を展示しました。広い会場には延べ1000人もの方が訪れ、これまでにない規模の交流会となりました。坂本廣子さんの講演要旨を紹介します。



講師 坂本廣子さん

五感を使って「ほんもの」の体験を

現在、日本の小中学生の学力、特に読解力が低下していると言われています。それは今の子どもに基礎的な体験が少ないからです。子ども時代の豊かな経験は、とても大事なことです。

私の子ども料理教室では、料理を教えることを目的とはしていません。料理をとおして本物の「食」に出会う「経験」を目的としています。材料はすべて本物を使います。インスタントは一切使わず、料理のプロセスを大事にします。はしょったりしては意味がありません。メニューも「さばの味噌煮」や「白和え」など、子ども向けではありません。しかし自分で一生懸命作ったものは、自分の意思で、自然に食べるものです。本物を食べ、おいしいと実感すると、子どもは変わります。食べず嫌いの多かった子が一口は食べてみるようになったり、「もったいない」という言葉の口にするようになったりします。

子ども自身が体験し発見したことは絶対に忘れません。発見することの喜びを知り、学ぶことが楽しいという人生は、豊かなものになります。

「自分は素晴らしい」と思える子どもに

今の日本の子どもには、「自分が素晴らしい」と思える体験が乏しいと思います。謙遜の文化や叱りつけるような言葉かけなど、子どもの自信が育ちにくい状況があります。自分に自信が持てず、社会との接点を失くすと、自立はできません。子育ての最終目的は自立。子どもは自信を持つことで自立していくのです。

自分の素晴らしい自分を実感するために、五感を駆使する「食」の体験は最適です。料理教室では小さい子にも「手のひらの豆腐切り」を体験してもらいます。包丁は良く切れるものを使います。使い方をきちんと説明すると、2歳の子でも使うことができます。手の上に豆腐を乗せ、スプーンと包丁を入れていく。油断すると手を切るのでもとても緊張しますが、やり遂げるとものすごい自信になります。将来苦しいことや辛いことに会った時に、「自分はこんな難しいことを、自分でやろうと思っただけで、できた」という根底の自信があれば、乗り越えることができるのです。

私は「食の通訳」

私の仕事は「食の通訳」だと思っています。食べもののよさが伝わるような料理方法を紹介する、食べものの人となつなぐ仕事です。本物の食材を入手することも、味の通訳の仕事です。最近私の住む兵庫県にもグリーンコープができて、本物の食材を容易に入手することが可能になりました。生産者が心をこめて作った食材を生かして食べ、このことを伝え続けていきたいと思っています。現在世界中で進められているスローフード運動には「味覚教育」を担うという側面もあります。味覚を養うには本物の素材を味わう必要があります。その味を知っていると、味覚はどんどん育ちます。できるだけ小さいうちに味覚の基礎を作ることが大切です。

メーカー大試食交流会



おいしそうね



原料は国産?

「おすすめは?」「食べたことないけど、どんな味?」。参加者は興味津々でメーカーの担当者とのコミュニケーションを楽しんでいました

子どもには本物の体験ができるチャンスがたくさん与え、よりよい人生を送れるような基礎を、ぜひ食育で作ってほしいと思います。グリーンコープの組合員であれば、本物に出会わせることもできます。このような食育の取り組みを地域の中に根付かせることが私たちの役割であり、次の世代に残せる財産になると思っています。

グリーンコープがめざす生活協同組合



グリーンコープ誕生前夜2

グリーンコープの前身生協は「ちくれん」(福岡地区事業生協連合)と「共生社」(共生生協連合)という二つの組織をつくっていました。せっけん派生協としての資質は共通したものを持っていました。それぞれに大きく異なる特徴がありました。その生い立ちや個性はグリーンコープ誕生後、大きな葛藤を生み出しました。しかし、それこそがグリーンコープの深さと広さの母体となったと言えます。

「共生社」はせっけん派生協の中では、コンピュータの導入や職場の近代化に早くから着手しました。コンピュータ導入以前には班毎に集計し集金も行うなど、組合員は班を中心に濃密な関係性にありました。また、生協の事業と運動は組合員も専任職員と一体となつて行っていたとも言えます。事業や職場の近代化は、専

官の心 読者投稿欄

新テーマで募集中

● 400字程度 ● 月切 毎月末
● 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
● 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅前中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープ(ニケー・ニワカス連) (REEN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメール nikohe@greencoop.or.jp

2008年7月の組合員数 397789人 (7/26現在)

リユース リサイクル データ 2008年6月分			
牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドバック
回収本数 914,400本 回収率 98.5%	今月のデータ掲載はありません	回収重量 13,950kg 回収率 57.6%	回収重量 38,610kg 回収率 110.9%

放射能汚染測定結果報告(179) 2008年6月

検体名	産地	セシウム			計 合 ベクレル/kg
		134	137		
※ 梅	大分県	ND	ND		ND
※ 煎茶	福岡県	ND	ND		ND
※ はと麦ミックス茶	日本・中国・インド	ND	ND		ND
※ はぶ茶	インド	ND	ND		ND

グリーンコープ

組合員
ワーカーズ
職員
リレーメッセージ

未来へつなぐ20年 私の思い

グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの
人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つ
とつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープ
の成熟へとつながってきています。この一年間、さま
ざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもと
いていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワ
ーカーズ・職員からのリレーメッセージを掲載します。



グリーンコープの成人(20年)
を心から祝いたいと思います。
一方、グリーンコープ生協みや
ざきの歴史はその半分と少しだ
けです。とは言え、私個人の生
協活動は40年以上です。

宮崎の生協は大学生協に間借
りをして出発し、市民生協、県
民生協へと発展しました。私も
その中に身をおき、多くのこと
を学びました。それは今でも感
謝しています。

学びをとおして得た、「食」
へのこだわりや子育て・環境問
題・社会の動き、平和問題への
取り組みなどについて、時が経
つにつれ、その生協に対して、
どうしても禁じえない不満を抱
えていきました。そんな時に出会
ったのがグリーンコープだったの
です。今から12年前のことです。
早速グリーンコープに加入
しました。加入したとはいえ、
まだ班があるだけで、ちゃんと
した組織は成り立っていません
でした。

そもそも、何もないところに
(ないどころか大きな生協があ
りました)、もう一つ、生協を

「グリーンコープ生協みやざき」のあゆみと私

元グリーンコープ生協みやざき設立準備会 代表 雲山 玲子

作るわけですから、その大変さ
は想像するに余りあります。

結論から云うと、有志による
運営委員会ができ、生協設立ま
で、との約束で代表を引き受け
ました。当時、事務所は市内か
ら離れた場所であり、運営委員
会の場所を借りる資金もなく、
私の自宅を使つてのスタートと
なりました。専務理事の大橋さ
んを中心に検討を重ねました。
他県の先輩や当時の連合専務の
行岡良治さんを講師に話を聞
き、勉強しながらグリーンコー
プへの理解を深めていきまし
た。正式に「グリーンコープ生
協みやざき」として発足するま
での年月は、あつと云う間に過
ぎていったような気がしていま
す。

その間、みやざきの代表とし
て、連合理事会にも出席しまし
たが、ついていくのがやつとの
劣等生の感を拭えなかつたこと
を覚えています。多くの方々の
支援を受けて、グリーンコープ
生協みやざきが誕生し、その出
産に立ち会えたことに心から感
謝しています。

福祉切り捨てとも思える今の
世の中、グリーンコープの存在
は大きく、私は大きな期待を持っ
ています。また、「自分にでき
ることは、今すぐやる」を忘れ
ず、これからもう少し頑張ろう
と思っています。

くまもと共生社(現グリー
ンコープ生協くまもと)では
20数年前、週一回の共同購入
では賄えない牛乳、豆腐、野
菜を中心に地区センターや組
合員のガレージを借りて「青
市」があちこちで開かれるよ
うになっていました。その中
から発展して生まれたのが、
「くすのきマミー」です。事
業高の伸長と共に「マミー」
は生協活動から離れ、「店舗」
としてひとり歩きをはじめ
ようになっていました。そん
な当時の連合専務理事の行岡
さんが来られ、「あなたたちは
は、何をしたいんや？」と繰
り返し問うたそうです。「地
域に必要とされる店として、
家族の健康や環境を共に考え
ていく店ワーカーズ・マミ
ー」の誕生です。自主管理・
自主運営・独立採算で事業を

グリーンコープにかかわって…
マミーと共に20年

企業組合・マミー元理事長 津田 律子



していくことを高らかに宣言
したので。私は「活き場」
を失っていた委員会活動で得
たさまざまな知識や情報を
引つぎ迷わず「マミー」に
飛び込みました。

せつけん祭の企画、情報誌
「マミー便り」の発行、手づく
りの惣菜の販売など、主婦の
柔らかな手で紡ぎ出される事
業は、地域に新しい風を起こ
しました。一方、毎月の損益
計算書、収支報告書から見え
る事業の結果に一喜一憂しま
した。ワーカー会議では、初
代理事長の岡山さんが、「私
たちは何のためにやっている
のか、というのを忘れない
で」と発言していました。

「せつけんの利用を増やすこ
とは、水環境をよくすること」
「国産の野菜や肉を食べるこ
とは日本の農業を守ること」

「ネグロスのバナナを食べる
ことで南の人々の自立の手助
けができる」など、そのよう
な思いを事業に託してやって
きた私たちはワーカーズであ
ることに誇りと大きな喜びを
持っています。時給は何年も
変わらず、事業を推進してい
く上での、「アンペイドワー
クが当たり前」「好きなこと
をして、そこそこの収入が得
られるならそれでよし」と、
してきたワーカーズ。そうい
う状況がワーカーズの敷居を
高くし、今にいたる後継者不
足を招いているのかもしれない。
せん。このことは自分たちで
超えていく必要があると思っ
ています。いろいろなことが
ありましたが、ワーカーズは
グリーンコープの店にかかわ
り続ける私の原点なのです。

「生命が原点」を
貫き続けて地域に根ざすグリーンコープ生協さが
専務理事 伊藤 正樹

コープ連合結成の前月です。大学
時代から、環境問題やエコロジ
ー、食べものの問題に関心を持っ
ていた私は、佐賀に新しい生協が
できることを心強く思っていました。
そこで働くことができたこと
は幸運でした。

当時出会った方々のパワー、言

帯がスタートし、新しい出会いと、
事業連帯による業務の改革も大き
く前進しました。そして、グリー
ンコープ共同体が誕生し、「大きく
連帯して小さく動く」ことの新し
いチャレンジがはじまりました。

グリーンコープ生協さが、法
人化20周年を来年2月に迎えます。
設立当時は約8
00人だった組
合員も、もうす
く1万人にな
るところまで
広がりました。

この20年間、さ
まざまな困難や
不十分さを抱えながらも、グリー
ンコープ内外の多くのみなさん
との出会いや支えでやつとここま
で来ることができました。

「生命が原点」を貫き続けるこ
とで、グリーンコープを地域に根ざ
していけるように頑張っていきま
す。

1986年11月、16人の母親た
ちにより、グリーンコープ生協さ
がの設立準備会が生まれました。
佐賀県内で初めての「せつけん派
生協」設立のスタートです。当時
のちくれん南ブロックの一員であ
った共生クラブ生協(現グリー
ンコープ生協ふくおか)の多大な支援
を受けて誕生す
ることができま
した。専務理事
や職員までをグ
リーンコープ生
協さがに送り出
すという支援人
事や、配送も大
川市にある同生協の配送センター
を使わせてもらい、後方部門や組
合員拡大などさまざまな支援をい
ただきました。そして、その1年後
の1987年11月15日に設立総会
を迎えます。

私が入協したのは、その翌年の
1988年2月でした。グリーン